樽ケ橋観光開発の先駆者

伊藤　建七郎

景勝地「樽ケ橋」　昭和１２年頃

伊藤建七郎は明治２年（１８６９年）黒川村（現胎内市）に生まれます。27才にして東京明治法律学校に学び、明治４２年（１９０９年）５月、第３代黒川村長に当選、これ以後昭和８年（１９３３年）５月まで２６年間にわたり郷土の開発に努力されました。

村長に就任した伊藤は、胎内川発電の大工事に着手し、樽ケ橋に発電所をつくり、発電用水の一部を下館・黒川地区にかんがいする大江用水を設けました。また明治４４年（１９１１年）、黒川から下館を経て坪穴に通ずる道路の改良工事を行い、黒川地区と胎内地区を結ぶ大動脈を開通させました。現在みられるケヤキ並木は、このとき開通記念として植えられたものです。

昭和３年（１９２８年）には「樽ケ橋」を当事県下唯一と言われた鉄筋コンクリートアーチ式、欄干は石造りのものに架けかえ、藤の花・巨岩とともに樽ケ橋景勝地の基盤をつくりました。このモダンで優雅な橋は、周辺の自然と見事にとけあい、昭和４２年の羽越水害で壊滅するまで、四季をとおし多くの人々を魅了しました。

土木事業、観光事業のほかに、教育の充実を図るため優秀な教師を招くなど、教育の振興にも尽くされました。

昭和２１年（１９４６年）９月に逝去。享年７８才。昭和２７年（１９５２年）１１月には伊藤建七郎の功績を称え、鋳像が樽ケ橋公園内に建立されました。